宗祖親鸞聖人

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。
自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大道を体解して、無上意を発さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。
自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

はじめに

同朋会運動は、この現代社会のなかに一人の人間として生き生きと生きていく道を、本願念仏のなかに聞きひらいていく歩みでありました。そのため、同朋の会が発足しました昭和三十七年の六月に『現代の聖典―観無量寿経序分―』を発行、わたしたちが生きていくうえで、仏教はなにを教えるのか、また、どこで仏教は現実の問題とむすびつくのかを学んでまいりました。

そして、その歩みのなかから、真宗の教法を聞信していくものの具体的なすがた―真宗の人間像を明確にすべきであるという要望がでてまいったのであります。それは今日、同朋会運動の基本課題として「真宗門徒としての自覚と実践」というテーマが荷負われたことと軌を一にするものであります。

そのような課題に取りくみ、学んでいこうとしますとき、なににもまして、その導きとなりますのは、いうまでもなく、宗祖親鸞聖人その人のご生涯であります。ここにあらためて、宗祖親鸞聖人のご生涯をテキストとして編纂いたしましたのも、そのためであります。

『現代の聖典―観無量寿経序分―』と併せて、この同朋の会テキスト『宗祖親鸞聖人』が用いられ、真宗人としての生きざまが、わたしたち一人ひとりのうえに確立されていくことを、心から念じてやまない次第であります。

昭和五十三年九月十日

宗務総長　嶺藤　亮

『宗祖親鸞聖人』発刊について

わたしたちは、いわゆる教団の内外を超えて、人間の魂の回復を訴え、因習のなかに埋没してしまっていた宗門を、聞法者の共同体として形成していくことを願いとして、今日まで歩んでまいりました。そして、その歩みは、必然的に、真宗の教法に遇い、目ざめるとき、人はどのような生きざまをなしていくのか、より端的にいえば、真宗の人間像とはどのようなものなのかを問うこととなりました。

もし、わたしたちの歩みのなかで、真宗の人間像が明確にならないままに終わりますならば、わたしたちの信心は、まさに『涅槃経』に説かれています「ただ道あることを信じて、すべて得道の人あることを信ぜ」ないところの、信不具足の信にとどまることになるでありましょう。つまり、「得道の人」との出会いをぬきにすれば、真宗の教えは、わたしたちの身につかないことになるのであります。

「得道の人」とは、本願念仏の教えの真実であることを実証していられる人であります。そして、その「得道の人」として、わたしたちにとってもっとも具体的な名が、宗祖親鸞聖人であります。

今日、いわゆる親鸞ブームと呼ばれるほどに、文化人や知識人によって、親鸞聖人についての論評・著作がつぎつぎと出版され、語られています。それらは、いろいろな思想・立場にある人が、その立場から親鸞聖人の人間像に光をあてられたものとして、現代人にとっての親鸞聖人の意義の幅広さをおのずとあらわしています。したがって、その親鸞ブーム自体は、たいへん喜ばしいことなのですが、しかし反面、それは、親鸞聖人についてのイメージを混乱させ、また、親鸞聖人の意義を、たんに人間的な偉大さという面においてのみ見ていくという問題をもっています。

テキストの名を「宗祖親鸞聖人」としましたのも、実は、そのことを思ってのことであります。ここに学ぼうとするのは、どこまでも、宗祖としての親鸞聖人であります。

しかしそのことは、決して親鸞聖人を絶対化することでもなく、また、教理にしばられたかたくなな眼で親鸞聖人をみることでもありません。

宗祖として仰ぐということは、文字どおり得道の人として出会っていくということであります。そして、その得道の人として出会っていくということは、その人との出会いにおいて人間としての生活のなかに、端的にいえばこの私のうえに、すでに道あることを信ずるということを意味します。道あることの実証をみるということであります。

したがって、「宗祖親鸞聖人」を学ぶということは、そのまま、わたしの生き方、在り方が問われ、学ばれてくるということなのであります。

目次

はじめに
『宗祖親鸞聖人』発刊について
第一章　人と生まれて……7
第二章　発　心……12
第三章　道を求めて㈠―懸命の修学―……16
第四章　道を求めて㈡―六角堂参籠―……20
第五章　本願に帰す……28
第六章　法　難……34
第七章　民衆にかえる……42
第八章　大悲に生きる……48
㈠　愚者になりて……48
㈡　正定聚に住す……50
㈢　悪人正機……53
㈣　弟子一人ももたず……56
㈤　善鸞義絶……59
㈥　念仏者のしるし……61
㈦　無碍の一道……66
第九章　仏道に捧ぐ……68

凡例

一、本書は、親鸞聖人の伝記と、その法語によって構成されており、同朋の会等におけるテキストとして編集したものです。

一、法語は、真宗大谷派出版の『真宗聖典』によりました。

一、文意は、できるだけ法語にしたがいながら、読んでいちおうその内容がわかるように意訳したものです。ただし、和讃については、その性格上、文意をつけませんでした。

一、語註は、固有名詞・仏教用語・難解なことばの註釈にとどめました。

第一章　人と生まれて

承安三年（一一七三）、宇治にほど近い日野の地に、親鸞聖人は誕生された。父は日野有範。身分の低い公家であったが、のち隠棲していたといわれている。母については、源氏の流れをくむ吉光女であるとつたえられているが、たしかなことはなにもわかっていない。

聖人誕生のころ、都では平氏一門が栄華をきわめていた。しかし、その平氏もわずか十二年の後にはほろび、かわって源氏一門が武家政治への道をひらきはじめることとなる。しかもその間には、源平二氏の戦いや、比叡山・奈良の僧兵たちの争いのために、東大寺・興福寺をはじめ諸大寺が焼きはらわれてしまうという事件があいついでおこっている。それは、それまで人々に尊ばれてきていたものが、その権威を失い、人々のものの考え方が根底からくつがえされていくような、動乱の時代をあらわす出来事であった。そのうえ、地震や大火などがあいつぎ、さらに飢饉や疫病などのために、死者が都にあふれ、その死臭が人々の不安をいっそうふかい

ものにしていた。

誰も彼も、悲しみや苦しみに耐えながら、その日一日を生きぬくことに精一杯であった。ただそれだけに、その時代社会のすがたそのものが、人々に人間として生きていることの意味を問いかけていたともいえよう。

聖人は、そのような時代に、人として生をうけられたのである。

法語

〔一〕

ああ夢幻にして真にあらず、①寿②夭にして保ちがたし。呼吸の頃に、すなわちこれ③来生なり。一たび人身を失いつれば、④万劫にも復せず。この時悟らずは、仏もし⑤衆生をいかがしたまわん。願わくは深く⑥無常を念じて、いたずらに後悔を⑦貽すことなかれ。

（『教行信証』行巻・宗暁「楽邦文類」）

語註

①寿　いのち
②夭　若死に、早死に
③来生　来世のこと
④万劫　はかりしれない長い時間をいう
⑤衆生　生きとし生けるもの
⑥無常　すべてのものが絶えず移り変わっていること
⑦貽す　あとにのこす

文意

ああ、人の世は夢幻であって、まことでない。いのちはかなくて、いつまでも留めることはできない。ひといきの間にこの世は過ぎ去ってしまうのである。ひとたびこの身を失えば、永遠にかえってくることはない。今ここにおいてさとらなければ、仏もまたなすすべもない。願わくば、人生の無常を深く心に留めて、悔いなきいのちを生きてほしい。

〔二〕

今日 道場の諸衆等、
恒沙 ②曠劫 ③よりすべて経来れり。
この人身を度るに④値遇しがたし。
たとえば⑥優曇華の始めて開くがごとし。

（『教行信証』行巻・法照「五会法事讃」）

文意

今日、道場に集まった人たちは、かぎりない求道の時をへめぐって、いまここまできたのである。よく考えてみると、この身をうけることは、まことにまことに出会いがたいことである。たとえば、優曇華の花がはじめ

て咲くのをみるようである。

語註

①道場　仏道修行の場。ここでは人生そのものを道場とみる
②恒沙　インドのガンジス河の砂のこと。はかりしれない数をあらわす
③曠劫　はかりしれない長い時間をいう
④度る　度はものさしのこと。ここでは仏の教えに照らしてよく考えること
⑤値遇　あいがたいものに出会うこと
⑥優曇華　三千年に一度だけ咲く花。あいがたいことのたとえ

〔三〕

この五濁（①ごじょく）・五苦等（②ごくとう）は、六道（③ろくどう）に通（つう）じて受（う）けて、未（いま）だ無（な）き者（もの）はあらず、常（つね）にこれに逼悩（ひっのう）す。もしこの苦（く）を受（う）けざる者（もの）は、すなわち凡数（ぼんじゅ）の摂（しょう）にあらざるなり。

（『教行信証』信巻・善導「観経疏序分義」）

文意

この五濁・五苦などは、どのような生き方であってもそれをうけ、まぬがれているものはひとりもいない。いつもこれに悩んでいる。もし、この苦をうけない人があるならば、そのときには、その人はもはや凡夫の数に入らない。

語註

①五濁　末世のいとうべきすがたを五種にあらわす。
○劫濁　病んでいる時代そのものをいう
○衆生濁　人々が不健康になること。純真さを失い、享楽的になる
○見濁　思想の混乱。たがいに自分の考えを正当化し、他人を非難しあう
○煩悩濁　人間不信。人を信頼できず、自分中心にしか生きられない
○命濁　人として生きる喜びがもてない。幸せをもとめながら、かえって不幸の因ばかりつくっている
②五苦　人として出会う苦しみのすべて。善導は、生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦をもってあらわしている
③六道　みずからの業によって感じる迷いの世界。そのすべてを六つであらわす
○地獄　身心ともにたえず苦しめられるところ
○餓鬼　つねにうえ、ものへの執着に苦しむ。むさぼりにより、飢渇にさいなまれるところ
○畜生　自分のことしか頭になく、たがいに傷つけあっているところ
○阿修羅　いかりにおののき、自他を許せぬところ
○人　理想と現実に引きさかれているところ
○天　よろこびがつきはて、むなしさの底がないところ

第二章　発　心

養和元年（一一八一）、親鸞聖人は慈円のもとで出家得度し、範宴と名のられた。聖人九歳春のことであったという。

その出家の動機については、聖人一家に不幸な事情があったからとか、貴族の子弟の多くが出家させられた当時の風習によるとかという説がある。

いずれにしろ、聖人自身の選びに先立って、聖人をうながす事情があったのであろう。聖人はそれを仏縁として、出家への道をふみだされたのである。

苦しみ、悲しみにうちひしがれながら、しかもそれを訴える言葉も、場所ももたない人々のすがたを、幼い眼に焼きつけてこられた聖人にとって、出家の道は、人間として生きる意味を尋ねていく唯一の道であったのである。

法語

〔一〕

行者当に知るべし、もし解を学ばんと欲わば、凡より①聖に至るまで、乃至②仏果まで、一切碍なし、みな学ぶことを得るとなり。もし行を学ばんと欲わば、必ず有縁の法に藉れ、少しき功労を用いるに多く益を得ればなり。

（『教行信証』信巻・善導「観経疏散善義」）

文意

仏法を行ずる人よ、よくよく知らねばならぬ。仏法を知識として学ぼうとするなら、凡夫から聖者にいたり、さらにそのうえ仏果にいたるまでも、みなさわりなく学ぶことができる。しかし、もし仏法をわが身に行じようとするなら、必ず自分にゆかりのある教えにたよれ。なぜならば、どんなにわずかな努力でも身にあまる利益を得ることができるからである。

語註

①聖　聖者のこと。修行によってすでに迷いを断ち切った位

②仏果　みずからめざめ、他をめざましめる徳を成就した位

〔二〕

一一のはなのなかよりは

①三十六百千億の
光明てらしてほがらかに
いたらぬところはさらになし

一一のはなのなかよりは
三十六百千億の
仏身もひかりもひとしくて
③相好金山のごとくなり

相好ごとに百千の
ひかりを十方にはなちてぞ
つねに④妙法ときひろめ
衆生を仏道にいらしむる

（『浄土和讃』）

語註

①三十六百千億　浄土の華には、百千億の花びらがあり、その花びらに六色の光があって、たがいに照らし合っているので、六々三十六・百千億の光になるという。光にみちあふれた世界をあらわす

②ほがらか　あかるく光るさま

③相好　すがたかたち

④妙法　よく人をめざめさせる法